

臨床心理学の授業における体験学習としての描画法 — その教育効果と危険性 —

小早川久美子¹

The Effects and Dangers of Applying the Drawing Technique as Experiential Learning in the Clinical Psychology Class

Kumiko KOBAYAKAWA

I 問題・目的

近年、芸術療法という名が知られるようになり、その実践もよく見聞きする。例えば音楽療法とかアロマセラピーとか園芸療法などである。今まで教養や趣味の分野でなされていたことが、「療法」という名前がつくと、それだけでりっぱな心理療法に早替りすると皮肉られたりもする。

この百花繚乱というか混乱は、飯森（2004）も認めていて「芸術療法の広がりニーズの高まりともに、技法とその適応、治療者の職種などが多種多様化し、そのため乱立・乱用気味のところがないとはいえません」と述べている。この混乱は、芸術療法の定義をみるとよくわかる。

そこで、この混乱を整理していくのに、筆者は芸術療法の定義の狭義と広義を両端としたスペクトラムを想定してみる。

1. 芸術療法の定義、狭義と広義

まず、狭義の定義は、飯森（2004）によるものである。「芸術療法とはイメージ表現の包含するさまざまな作用を治療的に生かす療法のことである」。つまり芸術療法を「精神療法」「治療」と位置づけている。さらに同じ立場から大森（2004）は、芸術療法であるためには、治療対象・治療目標・治療脚本・終結という枠組みが明確である必要があると説明している。精神療法というからには、精神療法の見立て・契約・終結という治療構造を明確にする必要があるということであろう。

一方、広義でいくと、レクレーションやリハビリテーション、さらには芸術鑑賞なども含むのである。例えば、町田（2004）によるダンス・セラピーの定義では、「ダンスやムーブメントで身体的、精神的、社会的健康を維持、増進、回復すること」と述べられている。もちろんダンス・セラピーも芸術療法の中に含まれているのである。とすると、なんらかの症状や病気をもった人を対象として治す、治療するためというのではない。一般の人を対象とし、健康維持を目的とするならば、それも芸術療法であるということである。

そこで、自分が芸術療法を実施する場合や他者の芸術療法の実践を理解する場合、芸術療法の広義と狭義を両端に置き、その間のスペクトラムを想定し、実施する者がその間のどの位置にいるか

¹ 広島文教女子大学人間科学部心理学科教授

を明らかにすると理解しやすい。その際に2つの基準が役にたつ。1つは誰が実施しているかということ、つまり実施する者の専門性の違いである。2つ目は、実施する目的である。ここで、筆者がこのスペクトラムのどこに位置しているかを述べておきたい。

2. スペクトラム上での筆者のたつ位置

筆者は臨床心理士であり、もともと狭義の心理療法を医療領域で実践してきた。さらに1995年当時の文部省によるスクールカウンセラー派遣事業で教育現場に関るようになった。そして現在は、大学の教員3年目で、大学教育のただ中にある。スペクトラム上でいうと、狭義の芸術療法からスタートし、現在は、広義の芸術療法に向かいはじめている途上であるが、それでもかなり狭義の芸術療法に近いと思っている。

3. 目的

スペクトラム上のそのような位置にある筆者としては、教育領域で芸術療法を実践していく場合には、かなり慎重な姿勢で臨んでいるつもりである。教育のなかでの芸術療法は、危険性もかなりあり、安易に実施するべきものではないと考えている。けれども一方では、授業の中で試行的に実践した描画法のもたらす教育効果を実感している。大学生の教育という側面から考えてみても、かなり有効かつ有益な方法だと思う。今後、芸術療法を教育の場でどのように発展させていくか、その有用性を明らかにし、かつ実施上で生じてくる危険性やそれを避けるための留意点等を、実践例やアンケート調査をもとに検討してみたい。なお、アンケートに関しては実証的調査研究としてとりあげたのではなく、学生からフィードバックを得るための資料としてとりあげている。

本論に入る前に、教育の場における芸術療法が現在までにどのように実践されてきたか、次節Ⅱで簡単に概観してみたい。その後Ⅲで実践例を提示し、Ⅳではアンケート結果を示し、Ⅴで考察を、Ⅵでまとめを述べる。

Ⅱ 教育における芸術療法

1. 心理査定としての描画法

ここでは、芸術療法の中でも歴史的にも世間的にも知られていることの多い絵画療法・描画法に限ってみる。教育の場では、絵画療法というより描画などの心理テストとして興味をもたれた。バウムテストに始まり、人物画、家屋画、S-HTP、家族画、動的家族画、風景構成法、学校画、星と波テストなど数多くのものがある。絵画というのは、児童・生徒など発達のないし心理的に言語的コミュニケーションが難しい子どもたちにとって、確実にひとつの重要な表現手段である。また、それを通して子どもたちは自分の内面を直感的視覚的に相手に伝えるという直接性もある。

そのため小・中・高校の教員には、最も興味をもたれている領域と思われる。事実筆者がスクールカウンセラーとして勤務していた時でも、教員が児童・生徒の描いたものをもって専門家としての筆者の解釈を求めることはよくあることであった。

ここで、「臨床描画研究」が「学校臨床と描画」というテーマで特集を組んでいるので、教育の中での描画というのが、どのように教育の場で受け止められ、どのような働きをなしどのように扱われているか少し参照してみたい。

まず、寺嶋（2000）は、動的家族画やその他の描画テストを実施して、不登校や問題行動をおこした生徒の理解に役だて改善解決した事例をあげている。そして、学校現場で描画をアセスメントとして用い、そうして得られた情報を教育現場に則して適切に解釈できるような専門家の援助が必要であると述べている。さらに、専門家が身近にいないために、学校教員を長期にわたって研修させていき、その人をキーパーソンとした研修会の実施例を報告している。

寺嶋の児童・生徒の心を理解しようとする熱意と、描画テストに専門性が必要だと理解している点は評価できるが、年に数回程度を長年にわたって研修するだけで、キーパーソンとなるような教員を育てることができるのであろうか。筆者はこの点にささか疑問を感じる。心理査定のみでも描画の査定に関しては、かなりの慎重さを要する。テストバッテリーを組む際にも描画テストだけでは、実施するべきでない。描画テストは、直感的にクライアントの全体像や問題点を理解するという利点も大きいですが、主観もかなり入り込みやすいものである。心理検査の妥当性や信頼性といった問題からすると、ロールシャッハ法など他の心理検査に比べてまだ十分に確立しているとは言いがたい。

そのように心理査定そのものが、やはり専門性を要することであるし、教員が研修を重ねて査定として描画法を実施していくのは疑問である。もし、その児童・生徒のために査定が必要なら、専門家と連携すればよい問題であると思う。もちろん、教員が教育の一環として教育の目的で描画を実施していくことには、異論はない。

2. 体験学習としての芸術療法

では、教育の一環としての描画法とはどういうことになるか。従来の教育では、美術教育がそれにあたるのではなかろうか。筆者は美術教育については門外漢であるが、教育が目的である以上、美の追求や教員からみて望ましい価値観や姿に児童・生徒を向かわせていくという目的があると思われる。ところが、この点が芸術療法とかなり異なってくる点があるのである。そのあたりを森谷（2000）は、「学校教育そのものの目的は論理的で、間違いのない知識を教えたり、伝統を伝えたり、秩序を教えたりすることなのである。教育とは混沌とした子どもの心に秩序を与える仕事である」といい、そこに臨床心理学が無意識という概念をもちこんで児童・生徒を理解していくことは重要だが、同時に危険でもある、と指摘している。彼は、「無意識の領域まで踏み込んでいくのは、訓練を受けた教師以外は手出しをすべきでない」とし、「けれど他の教員は自分の手で扱うか、専門家に任せるか、という見極める能力だけはもっていてほしい」と述べている。このあたりの考えは全く同感である。

3. 構成的エンカウンターグループのI種類としての芸術療法

現在、描画法が臨床心理学的視点から教育の場でいち早く導入され実践されているのは、構成的エンカウンターグループのエクササイズのひとつとしてではなかろうか。構成的エンカウンターグループとは、この方法の開発者で主宰者である国分（1986）の説明によると、エクササイズ（演習・実習・練習・実験・各種ゲーム・スポーツ）を中心としたもので、リーダーは心理学者でなくても実施できる。それは、カウンセリングとして位置づけられており、教育の場での体験学習としても位置づけられているものである。

4. 教育の中での体験学習

国分の構成的エンカウンターグループが教育の場で支持され発展してきたのは、それが体験学習である点、教員が実施できるとした点ではなかろうか。人を育てるためには、従来の講義形式で知識伝達中心の教育だけではなくて、体験学習が効果的であることは、共通理解となっていると思われる。この体験学習が重要である点は筆者も全く同感であるし、臨床心理学分野においては、特に強調されていることでもある。

体験学習を明確にしようとする場合、星野（1992）の説明がわかりやすい。すなわち彼は、「体験学習の特色は、学習者中心である。主体性と現実性、協働性、創造性、試行性が要求される」「体験学習とは循環過程であり、体験する、指摘する、分析する、仮説化する、体験する」としている。臨床心理学は、臨床心理行為という実践にむけての学問であるし、臨床心理行為が、自分自身を用いた人間関係を基盤としてなされる以上、自分自身が体験する、そして自分と相手との関係を客観視するという臨床心理士にとっての基本的姿勢を身につけていくためには、体験学習は最も重要な教育方法ではなかろうか。

Ⅲ 授業で描画を導入した実践

1. 実施した参加者と授業科目名

A：大学院生臨床心理学コース修士課程1年生，7人。授業科目は「心理療法特論」

B：心理学科3年生臨床心理学コース生，8人。授業科目は「心理学専門演習Ⅰ」

2. 実施した課題

A：①九分割統合絵画法（以下NOD法と略す），テーマは「修士論文」 ②コラージュ療法

③箱庭療法

B：①NOD法，テーマは「卒業論文」

3. 学生に対する描画法実施目的についての説明

Aグループでは、田嶋（2003）「臨床心理面接技法2」の芸術療法の単元の時に体験学習として実施している。導入として実施の目的を以下のように説明した。「臨床心理面接技法を学ぶうえで

は、知的理解や基本的知識だけでなく自分自身が実際に体験してみることが重要で、自分がまずクライアントの立場にたちクライアント体験を実感する必要がある」

Bグループは、臨床心理学領域で卒業論文を書く予定の学生が受講している。実施目的として以下のように説明した。「論文を書くということは、与えられた知識を覚えていくという受身の姿勢だけでなく、自分の興味を追求し深めていくという能動的作業である。そのとりかかりとして自分の漠然とした曖昧な卒論へのイメージを整理するために実施する」

4. 実施方法

- ① オリエンテーション：始めるにあたって、上記の目的と以下の点を説明した。
成績に関係しないこと。終了後、シェアリングをすること。シェアリングの時、自分の作品を見せるのが嫌な人は遠慮なくパスと言ってほしいこと。他の人はそれを認めてほしいこと。作品については、1度筆者に提出してもらい、次の時間に返却すること。
- ② 実施：授業時間内
- ③ シェアリング：各人は、自分がつけた題を読み上げたあと、作品を他のメンバーに見せ、それについて感想や感じたことなどを述べる。他のメンバーの質問があれば答える。その後他のメンバーの印象や感想を聞く。
- ④ アンケート：後日、授業時間内で、描画法についてアンケートに答えるよう受講生に依頼する。合わせて筆者がアンケート結果を参考に論文執筆することを告げ、また、そのためにアンケートでの意見を論文に掲載してもよいか、掲載を望まないかを尋ねる。(許可のあった者のみそれらの意見を掲載している。)

5. 描画法の種目選定に関して一心への浸襲性という観点から

まず、教育という場の中で描画法を選ぶ際に最も留意した点は、心への浸襲性の度合である。心への浸襲性とは何か。それは、無意識領域も含めた内的心理的世界に、侵入する度合い、良くも悪しくも影響を与える度合、平たく言うと心を揺さぶる度合といったらいいだろうか。この言葉は、統合失調症に対する心理査定や心理療法の実施時に、その危険性を指摘する際によく使われる言葉である。例えば、風景構成法を開発した中井(1996)は、「箱庭療法と風景構成法が『浸襲性と適応が全く異なった』」という風に使っている。中井がこの浸襲性にかなり重要な意味づけを持たせて治療の中心に据えていることは、中井が「枠付け法」を創案したことからもわかる。

枠付け法は、心理査定や心理療法を実施する者が、画用紙に外枠を記入して相手に渡すだけなのであるが、この枠付けが心理的にはかなり重要な働きを担ってくるのである。このあたりの説明は、山中(1999)が中井を引用しつつ説明しているのがわかりやすい。つまり、「枠付け」は「描画を容易にするが、言わば集中を強い、逃げ場がなく、描かないわけにはいかない感じを起こさせる」しかし枠がないと「とりとめもなく、どこまでも無限に広がっている感じで、雑多なものを描きこめるが、何を描いてよいかわからず、まとまりにくい」つまり枠は表出を保護すると同時に、強い

る、という二重性があるというのである。このように浸襲性に対する配慮と二重性を理解していることが、心理査定や心理療法の結果に重要な影響をもたらすのである。

このような浸襲性を考えて筆者が選択した描画法が、NOD法である。A4の画用紙が9分割されていて、そこにひとこまずつ絵を描いていく方法である。それは森谷（1986・2003）のオリジナルであり、個人心理療法から始まり発展していったもので、現在ではイメージ調査法として用いられ、「アイデア・プロフェッサ」としての利用方法がとりあげられている（森谷、1996）。例えば、「卒業論文」という題で描かせる。そこから学生が卒論についてどのように頭で考え、どのような気持ちを持っているかを理解する。その結果、卒論指導の方針なりを決めていくのに、教員の役にたつといわれている。

次に、コラージュ療法であるが、これも森谷（2003）と杉浦（1994）のオリジナルである。2通りの方法があるが、今回は森谷（1993）のマガジン・ピクチャー・コラージュ法で実施した。つまり自分達で持参した雑誌新聞などの中から、自分で切り抜き自分で貼り付ける方法である。コラージュ法を選択した理由は、すでに学校の美術教育の中で実施してきている者も多く、教育という場でなじみであること、自分の好き好きに切り貼りするというだけなので、「自分の美術表現力がない」とか「絵がへただから嫌」といった抵抗感が少ないと考えたことである。

箱庭療法は、NOD法・コラージュと比べて描画法には入らないが、授業で実践したのでアンケートの項目には入れている。箱庭療法は、筆者の感覚からすると、最も浸襲性が高いものであり、授業への導入については最後まで迷った。そこで箱庭についての講義を実施したうえで、箱庭をみんなの前で実施してみたいという希望者がいたら実施することにした。実施希望者がいたので、セラピスト役としても希望者を募り、筆者も含めたその他のメンバーは参加観察者とした。終了後は、クライアント役の学生の感想を聞き、セラピスト役の人の感想を聞き、それぞれ観察者が印象を述べるという形をとった。教育という場での実施にあたって、田中（2002）が大学院生の授業で実施した箱庭ワークも参考とした。

6. 実施人数

人数の選び方は重要な点である。C. Case & T. Dalley（1992）が紹介している英国芸術療法協会の芸術療法家の専門職実践における原則によると、「クローズド」グループでは8～10人を、「オープン」グループは12～15人を越えるべきではないとされている。クローズドで適切な人数になりうる授業でのみ各技法を実施した。

7. シェアリング

シェアリングは、「同じ体験をしたもの同士が体験を共有する、わかちあう」といった意味あい最近では日常でも用いられる言葉になったので、そのまま使用している。シェアリングという言葉を明確に用いているのは、構成的エンカウンターグループの開発者である国分（1986）だと思われるが、ここではエクササイズを終わったあとのシェアリングも含めてセットで構成的エンカウン

ターと考えているのである。シェアリングでは、エクササイズを行ったときの気持ちや感情、終わってからの感想などを振り返り、それらをみなでわかちあう。これを実施することによって、エクササイズが単なる遊び、ゲームとは異なってくるという。

Ⅳ アンケート結果

アンケートの質問項目と、本論文で引用した意見のみを、資料1として本論の末尾に掲載している。

Ⅴ 考察

1. 体験学習の重要性

アンケートのNo1, No4, No8, No9, No10, No11, No13, No14で書かれているように、「自分で自分の心のみた気がした。でも、そんなことでもないと自分の心のみることなんてできなかつたと思うので、とても貴重な体験だった」、「自分を知っていく過程」、「内に向かって話しているような体験」であり、「前から思っていたことなのに新しく発見したという感じ」など、自分の体験と直面し深めていく体験だったことがわかる。さらにその体験は「楽しかった」「楽になった」などの心地よい体験ともなっている。また、「クライアントにとってそんな存在になりたい」「後々のセラピストで役にたった」など、カウンセラーになるための学習としてのクライアント体験ともなったようである。星野(1992)が体験学習で得られると述べた、学生自身の主体性と現実性、創造性がここでも得られていることが理解できる。

2. 心への浸襲性という観点から

当初の予想とは異なる点が2点あった。1つは、箱庭療法は「心への浸襲性が高い」と筆者は判断していた。しかし結果は、箱庭療法を実施しなかった者は浸襲性が1番としているが、実施したクライアント役は、No7「楽しく癒されたような安らかな気持ちになった」と述べているし、セラピスト役はNo9「後の体験で役にたつ体験となった」と述べている。浸襲性が1番ではないのである。すなわち「箱庭療法では無意識領域も表現されると学習しているので、何か自分の内面が露呈してしまうような不安な感じがするが、実際にやってみると安らいだ体験をしてよかった」ということではないかと想像される。

2つ目は、意外にもNOD法が1番とした者が7人中4人いたことである。推測される理由として、No1, No14, No15, No27, No34で述べられているように、ひとつには「絵を描く」ということに対する苦手意識が強いためではないかと思われる。

また、浸襲性で問題となるのは、描画法の種類そのものより、今回筆者が取り入れたシェアリングの問題であろう。シェアリングに関して最も意見が多かったのが、条件付きの肯定派である。次が肯定派で、No35, No36, No38, No47などである。「わかちあう」「人の意見が聞ける」などである。一人だけ、No51「必要でない。そこまでしたくない」という学生がいた。条件付きの条件をみてみ

ると、メンバーの関係性の問題である。「集団の強制力がなくて、拒否できるとか無理をしなくていい、自由な雰囲気がある場合」という条件である。

今回のメンバーは、院生は院生同士がいい雰囲気であること (No42) や学部生の場合、自分が希望して入っている臨床心理学コースのメンバーだったこと (No48) などで「自由な雰囲気」がある程度満たされていると教員も判断したし、学生もそのように記述しているものもいた。しかし全員がそうではなくて、教員の希望的予測だったという面もある。また、教員に対して、先生が見本をみせてほしい (No35)、先生からの感想がほしい (No45)、先生が中心となって安全性を保って頂きたい (No43) など、教員のリーダーシップを強く期待する声もあった。これは、ちょうどエンカウンター・グループプロセスの初期にファシリテーターに対して抱く期待と同じである。それだけに心理療法的な視点が重要になってくるといえる。

これらのアンケートの結果から、筆者は現時点では、描画法を授業に導入するのはやはり危険性があるといわざるを得ない。エンカウンター・グループの場合は、集団療法や自己開発という目的をもったグループという理解があるが、授業に対してそのような共通認識があるかどうか、教員に対してそのような認識があるかどうか現状では疑問である。教員とは今後日常場面でも交流があるし、なによりも授業を受けた学生の成績を評価するものでもある。役割が違うといわざるを得ない。

3. 授業で実施する場合の問題点

(1) 授業科目との整合性と合意

アンケートの中には出てこなかったけれども、実施する授業科目との整合性や必然性がない場合に、実施するべきではないと思う。大学院生の場合は、芸術療法の理解のためには、自ら体験してみることが必要であると学生が納得している必要がある。また学部生の場合には、卒論を仕上げていくためには、知的な作業だけでなく、意欲や動機付けといった感情の部分も大いに関係し、それを自覚し直面していくことも大切である。そのためにNOD法を実施する、といった説明を教員がして、学生が納得する必要があるであろう。

(2) アンケートの偏り

今回のアンケートは筆者の授業で実施した描画法について筆者の目前で記入してもらったものである。事前に「成績には関係ないこと」「論文に記載が嫌な人の意見は載せない」などと明文化した。けれどもやはり、教員と学生という関係は変わらず、まだ継続して学生と教員の関係を続ける以上、教員に対する過剰の配慮をしたり教員からの評価を気にするのは当然のことと思われる。そういう意味でこのアンケートの信頼性にバイアスがかかっているといえるだろう。

4. 今後の課題と描画法導入の際の留意点

(1) 授業の構造

心理療法・心理面接を実施する場合の時間や場所などの面接構造がどれだけ、セラピストとクライアントを守るものであるかは、周知の事実である。同じような考え方で、授業で実施する場合には、授業の時間や場所などの構造を守るという意識が必要であろう。またその心理構造の中で一番重要なのは、面接におけるセラピストとクライアントの関係と同様に、授業においても教員と学生の関係が重要になってくるであろう。

(2) 実施描画法の種類

次に重要なのは、どの描画法を用いるかという描画法の種類の問題ではなからうか。筆者が用いたNOD法・コラージュ法は、芸術療法の中でも最も浸襲性が少ないと筆者は考えている。それはNOD法自体が、風景構成法の枠組みをより強固にしたものであるからである。その風景構成法は、統合失調症のクライアントなど、最も浸襲性に配慮すべきであるクライアントに対しても実施可能で効果的なものである。そういうわけで、NOD法も細心の注意が払われている描画法と考えてよいと思われる。

角野（2004）がいみじくも述べているように「描画療法においてはまだその治療効果は十分に明らかにされておらず、まだまだ多くの治療的利点が発揮されていない」、「描画自体には、まだまだ未知の部分が多く、治療的な効果においてもこれから十分な研究が必要である」、このような現状なので、描画法の種類を浸襲性の観点から各描画法を比較した実践研究や実証的研究が、今後ますます必要となるであろう。

(3) シェアリング

先に述べたように構成的エンカウンター・グループでは、シェアリングはセットになっているものである。しかし、それは、実施前のウォーミングアップも入れて、一連の流れのなかでのセットである。

授業では、学生は受講希望者として受講しているのであり、教員が受講学生を選んだりはない。またウォーミングアップの時間がかけられない。授業場面でのシェアリングは慎重に行う必要があると筆者は感じる。授業内容を事前に十分に説明して、そのようなシェアリングが行われるということを受講した、ということなら実施が可能かもしれない。

現時点では、シェアリング実施に関して、教員が不安がある場合は、授業の中で無理に実施する必要はないと思われる。また作品を教員に提出する必要はないとすると、学生の不安はかなり下がるのではなからうか。

(4) 描画に対する抵抗感

熟年世代と比較すると、20代世代は児童・思春期に漫画をかなり読み、中には漫画やイラストをじょうずに描くことのできる者が多い印象を筆者はもっていた。しかし、アンケートからもわかるように「絵がへた」という思いが描画に抵抗をもたらしている者が結構いる。成人の描画テストを実施する場合でも「絵がへただから」はよく聞く言葉であり、抵抗を抱く者は結

構いる。過去の美術教育で描画が採点される、評価されるという経験のみをしてきたためであろうか。それを補うためにNOD法では「絵でなくても、文章でもいいですよ」と代替案を提示したりしているが、そのような工夫で安心して描画できるかもしれない。

VI まとめ

本論では、大学および大学院の臨床心理学分野での授業に描画法を取り入れた実践例をもとに、その教育効果を明らかにした。同時に、その危険性を指摘し、実施する際の留意点をあげた。教育領域での描画法は、体験学習として重要であること、また心理臨床家になるためには、クライアント体験としての描画法を体験することに重要な意味があることを示した。実際に実施する際の留意点としては、心への侵襲性という視点から描画の種目を選ぶ必要があること、心理面接の時の面接構造と同じく、授業の構造を守ること、実施人数を制限すること、グループの状況によってはシェアリングを中止すること、などの工夫が必要である。さらに今後は描画法自体についても、教育領域での実践研究や実証的研究が必要とされることを述べた。

付記

広島文教女子大学大学院臨床心理学コース修士課程1年生の皆様、心理学科3年生、通称小早川ゼミの皆様へ感謝を申し述べます。筆者が授業内で描画法を実施するのははじめてで不慣れだったにも関わらず、学生諸姉は熱心に取り組み、アンケート調査にも心よく協力して下さいました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

文献

- Case, C. & Dally, T. 1992 The Handbook of Art Therapy . Tavistock Books
- 岡昌之監訳 1997 芸術療法ハンドブック 誠信書房.
- 飯森真喜雄 2004 序文 飯森真喜雄・中村研之編 絵画療法 I 岩崎学術出版社, P.4.
- 飯森真喜雄 2004 芸術療法とは何か 芸術療法研修セミナー2004 テキスト 日本芸術療法学会主催 於東京医科歯科大学 2004年8月6日～8日.
- 伊藤 俊樹 1992 芸術療法 氏原寛他編 心理臨床大事典, Pp.380-384.
- 角野 善宏 2004 描画療法から見たところの世界 日本評論社, Pp.1-2.
- 国分 康孝 1986 前書きにかえて 国分康孝監修 教師と生徒の人間づくり—エクササイズ 実践記録 瀝瀝社, Pp.9-19.
- 町田 章一 1998 ダンス療法の理論と展開 芸術療法2実践編 岩崎学術出版, P.140.
- 森谷 寛之 1986 イメージの多様性とその統合—マンダラ画法について 心理臨床学研究, Pp.371-82.
- 森谷 寛之 1993 コラージュ技法の導入方法 森谷寛之・杉浦京子・入江茂他編 コラージュ療法入門 創元社, Pp.5-14.

- 森谷 寛之・辻清香 1996 九分割統合絵画法でみた教育実習前後での教師イメージの変化 鳴門教育大学研究紀要, 13, Pp. 213-225.
- 森谷 寛之 2000 生徒指導に関する基本的考え方 入門編 森谷寛之・田中雄三共編 指導と心の教育 培風館 Pp. 5.
- 森谷 寛之 2003 芸術療法 大塚義孝他監修 臨床心理面接技法2 誠信書房, Pp. 124-136.
- 中井 久夫 1996 風景構成法 山中康弘編著 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社, Pp. 3-42.
- 大森 健一 2004 芸術療法とは何か 芸術療法研修セミナー2004 テキスト P. 3. 日本芸術療法学会主催 於東京医科歯科大学 2004年8月6日～8日.
- 杉浦京子 1993 コラージュ技法の導入方法 森谷寛之・杉浦京子・入江茂他編 コラージュ療法入門 創元社, Pp. 5-14.
- 田中千穂子 2002 心理臨床の手引き 東大出版会, Pp. 83-107.
- 田嶋誠一編 2003 臨床心理面接技法2 誠信書房.
- 寺嶋 繁典 2000 学校場面への描画の適用—教員を対象とした描画研修を例として 臨床描画研究, XV, Pp. 3-9.
- 徳田 良仁 1998 芸術療法 I 理論編 徳田良仁他監修 岩崎学術出版, P. 20.
- 山中 康裕 1999 心理臨床と表現療法 金剛出版 P. 36.

資料1 アンケート質問項目と結果

(1) 質問：どのような体験でしたか

- No1. 絵を描くのが得意ではないので「コラージュ」が一番気楽かなと思っていたのですが、意外にも作り終わった後、何だかとても淋しくなりました。その頃、今までの生活との急変に、これからの不安心、心の中の叫びがまさにその作品に表れていて自分で自分の心をみた気がした。でも、そんなことでもない自分の心を見ることなんてできなかったと思うので、とても貴重な体験でした。クライアントの方ももしかしたらこんな気持ちになることがあるかもしれない。その時は、どんな対応をするのか「やめたくなくなったらやめればいい」というのを切実に感じました。私の場合は作っている途中は楽しかったのですが、出来上がって眺めた時に涙がでそうになりました。でも、その後、みんなにこんな気持ちになったということを知ってもらえたので、楽になりました。自分の思いを分かち合える人がいていいなと思いました。私もクライアントにとってそんな存在になれたらいいと思います。
- No4. 自分に目をむけて、自分の中にあるあいまいなものをもう一度作り直しているようで、自分を知っていくことができた。内に向かって話しているような体験。
- No8. クライアント役：箱庭は楽しく癒されたような安らかな気持ちになることができた。
- No9. セラピスト役：箱庭に関しては、見守る役だったのでごく疲れもしたし、勉強にもなりました。後々のセラピーで役にたつ体験となりました。
- No10. これから先の事を物語りの様にイメージしていくのは、とても新鮮で自分自身がよくわかる体験だ。
- No11. 自分の今気になっていることや、やらなくてはいけないとあせっていること、気持ちの部分がすごくよく見えてくる体験でした。
- No13. 自分がこれからしなくてはならないことに直面できた気がしてよかった。前からおもっていたことなのに、新しく発見したという感じがした。
- No14. おもっていることをうまく絵に表現できず、もどかしかったです。
絵の上手下手ではなく、ただひたすら描くということは楽しかったです。
- No15. 絵は嫌いなのであまりいい気持ちではなかった。

(2) 質問：自分の体験から心理的な侵襲性が高いと思われる順に番号を記入して下さい（院生のみ）

表1 侵襲性が高いと思われる技法の順位

	箱庭	カラー ジュ法	NOD法
A	1	2	3
B	1	3	1
C	1	2	3
D	1	1	1
E	2	1	3
※F	2	3	1
※G	0	0	1

注 Fは箱庭療法の時にクライアント役で、Gはセラピスト役である。

(3) 質問：オリエンテーションはどうでしたか。

- ① 始める前の不安や緊張感はどの程度でしたか
- ② 教員がどんな事に留意してほしいでしょうか

No27. 絵が苦手で絵心がないので、好きでなかった。「誰にも見せなくてもよい」という前提にやってみくびくせずのびのびと下手な絵ですが楽しんで書けたと思う。

- ③ 授業で実施する際の問題点は、どんなことだと思いますか。

No34. NOD法では、絵が苦手だったりすると、それだけでも気が重くなってしまうから、絵が難しかったら言葉でもいいとか、無理にすべて埋めなくてもよいとか言ってもらえると気が楽になって落ち着いて取り組める気がした。

(4) 質問 実施後のシェアリングに関して

- ① シェアリングは必要と感じましたか？
- ② シェアリングではどんな事が必要でしょうか？
- ③ どのようにすれば望むようなシェアリングが実施できると思いますか

No35. 作品を作った人のことを拒絶・拒否しないこと。出来る人はシェアリングをするのがよいと思う。先生に見本を見せてほしかった。

No36. 人それぞれ抱えているものもあり、希望するならみんなで分かち合えばいいと思う。

No38. 自分の意見だけだと思考が固着してしまうので、人の意見を聞けることからシェアリングは必要だと思う。

No42. M1はお互いの関係がいい方だと思うので、シェアリングがあっても抵抗はなかったが、場合によっては困ってしまうかもしれない。

No43. 先生が中心となって安全性を保って頂きたい。

No45. 先生からの感想も少し頂けるとうれしい。

No46. シェアリングは嫌な人もいないかもしれないからできそうな人にしてもらいたいと思う。

No48. 同じメンバーだったので、今回も描きやすかった。男女混合で年齢とかもバラバラだったら無理だったかもしれない。

No51. シェアリングはあまり必要と感じなかった。できればそこまでしたくない。